

E-4 モンゴル語の存在を意味する動詞 *bajna*, *bajгаа*, *bajdag*, *bij* の使い分け

バスバヤル ムンフダラム (東京外国語大学大学院) munkhdaram@gmail.com

【要旨】従来モンゴル語の存在「ある」を意味する表現は *bajna* 「未知」と *bij* 「既知」の対立で説明されてきた。これらの2つの表現とほぼ同じ意味を表せる表現として *bajгаа*, *bajdag* もあるが、それぞれの使い分けについてはまだ十分に研究されていない。そこで、本発表では話し言葉において、4つの表現がどのように使い分けられているかを考察した。調査では、存在「ある」が現れる場面と対話文を設定し、どの表現の使用が適切であるかを問うアンケートを行った。結果、まず *bij* は話し言葉においてはほぼ使用されていないことがわかった。相手が「既知」と予想して存在を問う場合には *bajгаа juu?* が最も多く選択された。それに対する回答として、存在が「既知」の場合には *bajгаа*、探してみても見つかなかった「未知・発見」場合には *bajna* が使用された。加えて、存在の有無についての前提情報が皆無の場合、「普段、～はあるか」という存在を問う場合には *bajdag uu?* が選択されうるが、存在の有無について前提情報がある場合には *bajdag uu?* が選択されにくいことも判明した。

1. はじめに

本発表の目的は、現代モンゴル語の¹話し言葉において存在「ある」を意味する4つの表現 *bajna*, *bajгаа*, *bajdag*, *bij* がどのように使い分けられているかを明らかにすることである。これらのうち3者は、動詞語幹 *baj-* に *-na* 「現在・未来」(定動詞)、*-(g)aa* 「継続」(形動詞)、*-dag* 「習慣」(形動詞) の接尾辞が付加されたものであり、いずれも発話時点での存在を表すのに用いることができる。*bij* は不完全動詞 (defective verb)² と呼ばれ、時制などによる屈折を有しない。

本発表の構成は次の通りである。まず2節で先行研究をまとめ、問題提起を行う。次に3節で調査方法と調査結果について述べ、4節でまとめを行う。最後に5節で今後の課題をあげる。

2. 先行研究と発表者の内省に基づく問題提起

従来、モンゴル語で存在「ある」を意味する表現としては動詞 *bajna* 及び *bij* が取り上げられ、前者は「未知」、後者は「既知」であるとラベル付けされている。例えば、橋本・谷 (1993) は、次に示すように *bajna* が「未知・発見」、*bij* が「既知・確認」を表すと述べ、以下の例文を提示している (1, 2)。

「未知・発見」は、捜してみても、あった、なかった、という場合。あるいは相手が知らない新しい情報として、存在を告げる場合。「既知・確認」は、捜さなくても、あるかないか知っている場合。あるいは相手がすでに知っている古い情報として、存在を告げる場合。このような心理的ニュアンスの違いにより区別される。

(橋本・谷 1993: 82)

(1)	Bat	end	baj-na.	(発見)	(2)	Bat	end	bij.	(既知)
	PN	ここに	ある-PRS			PN	ここに	ある.PRS	
			「バトはここにいる」					「バトはここにいる」	(橋本・谷 1993: 16)

¹ 本稿で扱うモンゴル語とは、主にモンゴル国で話されているモンゴル語ハルハ方言を指すものとする。特にことわりのない限り、例文番号、日本語訳、グロス、表番号は発表者による。発表者はモンゴル国ザブハン県出身で1989年生まれのモンゴル語(ハルハ方言)母語話者である。本発表では発表者の内省により、例文の意味や機能などを判断することがある。例文の表記は、キリル文字による正書法に従い、ローマ字転写したものを用いる。ローマ字への転写は、梅谷 (2012: 47) に倣い、次の通り行う。a=a, б=b, в=v [β], г=g, д=d, е=je/jö, ё=jo, ж=ž [dʒ-tʃ], з=z [dz-ts], и=i, й=j, к=k, л=l [lʒ], м=m, н=n, о=o [ɔ], ө=ö [e], п=p, р=r, с=s, т=t, у=u [u], ү=ü [u], ф=f, х=x, ц=c [tʃ], ч=č [tʃh], ш=š [ʃ], ь=”, ы=y [i:], ь=’, э=e, ю=ju/jü, я=ja。カッコ [] は実際の音声を表す。

² 橋本 (2010:107) では、*bij* は存在を表す終助詞 (final particle)、もしくは不完全動詞 (defective verb) であると記述している。

アンケート調査では、会話などの話し言葉における場面を詳細に設定し、それぞれの場面において、bajna, bajгаа, bajdag, bij の表現のうちのどれが多く使用されるかをみた。まず質問項目の前に対話文 (1, 2) の場面をモンゴル語で示し、その場面の説明をよく読んでから回答するよう協力者に指示した。その次に、質問と回答の選択肢³を示した。

対話文の場面は次の通りである (下記の表 1 参照)。旅行中の 2 人が、昼食にしようとして食堂を探していた。ある施設をみつけたが、2 人はその施設に何があるかわからないので、1 人が施設へ入り、その施設にいる受付の人との質問と回答を交わすという場面を設定した (対話文 1, 2)。

エリシテーション調査では、探しているもの (食堂) の存在が確認できた後に、外で待っている相手からの質問に回答するという場面を設定した (対話文 3)。

表 1 には、対話文の例文に加えて、選ばれる可能性が高いと予想される順序に、> (不等号) と* (非文) の記号を用いて、それぞれの選択肢に対する発表者の内省に基づく判断を示した。

表 1: 対話文 1, 2, 3 と筆者の内省により期待される選択肢

対話文 1	施設の人に食堂があるか否かを確認する場面
	「質問」 A: en-d xool-nij gazar {baj-g-aa juu? > baj-dag uu? > *baj-na uu?} 「未知」 ここ-DAT 食事-GEN 場所 {ある-EP-CNT Q > ある-HAB Q > ある-PRS Q} 「ここに食堂はありますか」
	「回答」 B: {baj-g-aa > baj-dag > *baj-na} 「既知」 {ある-EP-CNT > ある-HAB > ある-PRS} 「あります」
対話文 2	その食堂で、空席はあるか否か確認する場面
	「質問」 A: sul širee {baj-g-aa juu? > baj-na uu? > *baj-dag uu?} 「未知」 空席 {ある-EP-CNT Q > ある-HAB Q > ある-PRS Q} 「(そしたら) 空席はありますか」
	「回答」 B: {baj-g-aa > baj-na > *baj-dag} 「既知」 {ある-EP-CNT > ある-HAB > ある-PRS} 「あります」
	「回答」 B: tür xülee-j baj-g-aaraj... 「少々お待ちください(調べてみます)」 少々 待ち-CVB ある-EP-OPT {baj-na > *baj-g-aa, *baj-dag} {ある-PRS > ある-EP-CNT, ある-HAB} 「ありました」 「未知・発見」
対話文 3	探しているもの (食堂) の存在が確認できた後に、外で待っている相手からの質問に回答する場面
	「質問」 A: xool-nij gazar {baj-na uu? > *baj-g-aa juu?, *baj-dag uu?} 「未知」 食事-GEN 場所 {ある-PRS Q, ある-EP-CNT Q, ある-HAB Q, ある-PRS Q} 「食堂はありましたか」
	「回答」 B: {baj-na > *baj-g-aa, *baj-dag} 「未知・発見」 {ある-PRS > ある-EP-CNT, ある-HAB} 「ありました」

³ ムンフダラム (2021) のアンケートでは、複数の回答が可能な設定にして調査行ったが、複数の回答を選んだ回答者は少なかったため、その回答を集計から除外した。本発表でも同じく 1 つの回答しか選んでいない回答のみを対象とした。

3.2. 調査結果

アンケートの結果では、bij はどの対話文においても最も少かった。51 名のうち、1 回でも bij を選択した回答者は 11 名のみであった。これらの 11 名の 8 名がホブド県⁴の話者であり、bij を話し言葉で使用しているのはもっぱらホブド県 (オイラト方言) の話者であると考えられる。本発表ではモンゴル語ハルハ方言を対象としているため、bij を選択した回答結果をはずして残る 3 形式の使い分けについて分析と考察を進めていくことにする。したがって回答者数の合計は 40 名となる。以下、3.2.1 節で対話文 1、3.2.2 節で対話文 2、3.2.3 節で対話文 3 についての結果をそれぞれ表と図で示す。

3.2.1. 対話文 1

対話文 1 では、登場する 2 者 A と B との間で存在物についての問い合わせが初めて行われる場面であり、A が探しているものについて B は当然知っているであろうという前提で「～はあるか」と尋ねている。つまり、A にとって存在物の有無は未知であり、B にとっては既知であると想定する。

表 2: 対話文 1 (再掲)

対話文 1	施設の人に食堂があるか否かを確認する場面
	「質問」 A: end xoolnij gazar {bajgaa juu? > bajdag uu? > *bajna uu? } 「未知」
	「回答」 B: {bajgaa > bajdag > *bajna} 「既知」

対話文 1 の質問とそれに対する回答の結果を以下の図 2, 図 3 で示す。

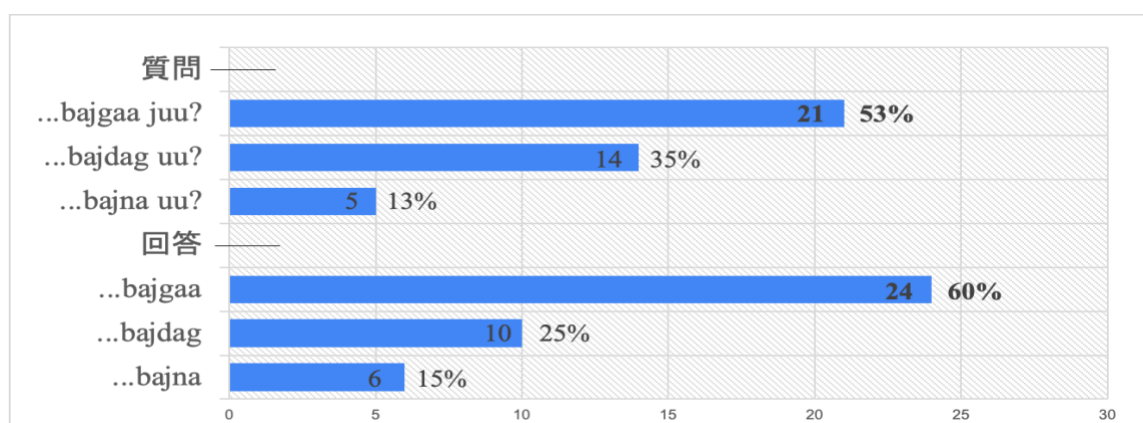


図 2: 対話文 1 の質問と回答

図 2 より、bajna の使用もみられたが、bajgaa, bajdag が多く選択されていることが分かる。いずれの文においても bajgaa の使用が最も多い。ここで bajgaa が多く選択された理由は、相手にとって存在が既知であるためであろう。つまり、橋本・谷 (1993: 16) の用語を用いるならば bajgaa juu?⁵ (質問) も、bajgaa (回答) も「既知」の意味があると言える。次に bajdag が多く選ばれたことに関しては、この施設の中に「普段、食堂はあるか」という恒常的なことに焦点を当てた確認でもあるため、この回答が選ばれやすかったものと思われる。この場合の bajdag uu? (質問) も、bajdag (回答) も bajgaa と同様に「既知」とプラス恒常性での使用であると考えられる。

⁴ ホブド県は、モンゴル国の最西端に位置する。

⁵ bajgaa juu?, bajdag uu? の juu, uu は疑問を表す助詞である。juu は直前の語が長母音か二重母音で終わっている場合の、uu はそれ以外の場合の異形態である。

3.2.2. 対話文 2

対話文 2 では、すでに対話文 1 によって A と B との間で情報がある程度共有された状態である。そのような状態で、A は B に探しているものに関連する何かを改めて「～はあるか」と尋ねる。つまり、食堂があるならば席もあるはずだが、その席に空きがあるかどうかを確認している。

表 3: 対話文 2 (再掲)

対話文 2	その食堂で、空席はあるか否か確認する場面	
	「質問」 A: sul širee {bajгаа juu? > bajna uu? > *bajdag uu?}	「未知」
	「回答」 B: {bajгаа > bajna > *bajdag}	「既知」
	「回答」 B: түр хүлээж байгаарай... {bajna > *bajгаа, *bajdag}	「未知・発見」

以下、対話文 2 の質問と回答 a, b の結果を図 3 から図 4 で示す。

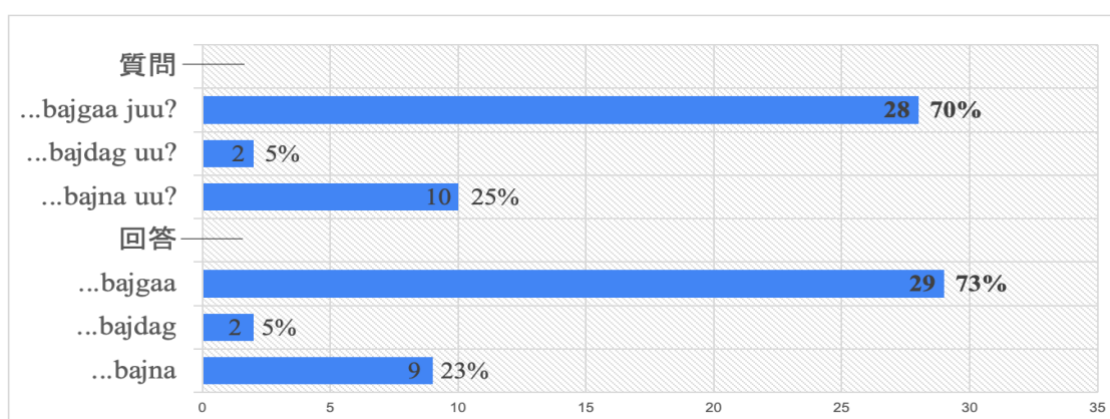


図 3: 対話文 2 の質問と回答 a

図 3 では、対話文 1 で 2 番目に多く選択されていた *bajdag* が減少し、*bajna* が 2 番目となっている。ここでも *bajгаа* の使用は多いが、対話文 1 におけるよりさらに増加している。*bajdag* が対話文 2 より対話文 1 で多く選択されたもう 1 つの理由を対話文 2 の結果を出してから説明が可能になる。それは、対話文 1 では施設の中に「食堂があったかいなかったか」という [前提情報が皆無] の条件下で使用されやすかったと思われる。次に対話文 2 で *bajdag* が減少した理由は、空席があるかないかは現時点の状態こそが問題となる事柄であり、「普段、空席はあるか」といった恒常的な存在／非存在を尋ねることは語用論的・状況的にふさわしくない。一方、*bajna* が対話文 1 より増加したことは、施設の中に食堂があることを知った上で、「(そうしたら)今、空席はあるか」といった現時点の状況が問題となるため、ここで使用されやすいと思われる。*bajгаа* と似ている部分も見られるが、詳細は今後の課題とする。

次に、対話文 2 の回答 b の結果をみる。回答 b は、A は B が既知であることを前提として尋ねたところ、B は知らなかった (未知)。そこで、B が存在物の有無を確認してから「空席はあった」と相手に答えている場面である。

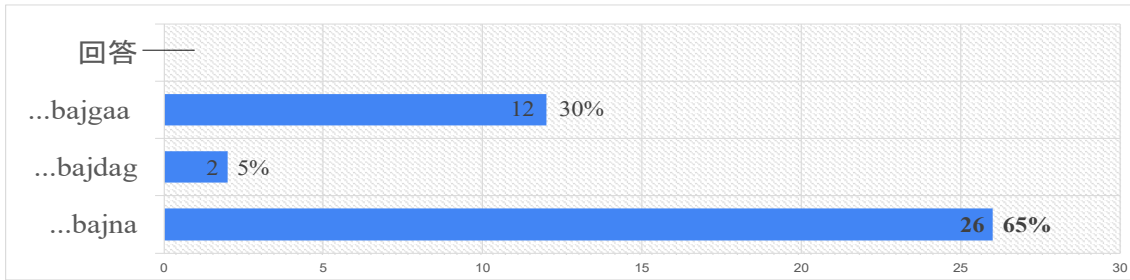


図 4: 対話文 2 の回答 b

図 4 では、bajna が対話文 1 より最も多く使用された。bajna が増えた理由は、橋本・谷 (1993: 82) が述べているように探してみてもあったため bajna 「未知・発見」が選択されたと考えられる。

3.2.3. 対話文 3

最後に、対話文 3 の結果をみる (4)。対話文 3 は、施設の人に探しているもの (食堂) の存在を確認できた後に、外で待っている相手からの質問に回答するという場面である。

表 4: 対話文 3

対話文 3	探しているもの (食堂) の存在が確認できた後に、外で待っている相手からの質問に回答する場面	
	「質問」 A: xoolnij gazar {bajna uu? > *bajjaa juu?, *bajdag uu?}	「未知」
	「回答」 B: {bajna > *bajjaa, *bajdag}	「未知・発見」

対話文 3 では、外で待っていた A に「食堂はあったか」と質問され、B が「食堂はあった」と答える場面である。この場面において、存在非存在についての情報は A にとっては「未知」で、B にとっては「未知・発見」である。下記の判断はエリシテーションでの協力者によるものである。

- (4) A: xool-ny gazar {baj-na uu?, *baj-g-aa juu?, *baj-dag uu?, *bij juu?}
 食事-GEN 場所 {ある-PRS Q, ある-EP-CNT Q, ある-HAB Q, ある.PRS Q}
 「食堂はありましたか」
- B: {baj-na, *baj-g-aa, *baj-dag, *bij}.
 {ある-PRS, ある-EP-CNT, ある-HAB, ある.PRS}
 「ありました」

インフォーマントによると例文 (4) にあるように、動詞 bajna 以外の形式は使用できないという。探しているものがあるか否かを確認してきた相手に対して質問する際は、bajna uu? 「未知」が使用され、その受け答えでも bajna 「発見」が使用される。対話文 1 にあったように探しているものが「あるか否かを (聞き手が) 当然知っている」と予想し尋ねた場面でもあるが、それに加えて探しているものが「あるか否かを探しに行ってきた」ことを知っているという状況である。このような場合では bajjaa juu? ではなく、bajna uu? が使用される (4)。したがって、探してみたりして「発見」したものの存在を相手に伝える際にも bajna のみが使用されるものと説明できる。

4. まとめ

先行研究では、モンゴル語において存在を意味する動詞 *bajna* は「未知・発見」を表し、*bij* は「既知・確認」を表し、*bij* は *bajгаа* と同じ意味であると記述されていた。発表者はこれらの3つの形式に *bajdag* を加え、それぞれの形式の使い分けの条件を調査した。調査の結果、まず *bij* の使用はどの対話文においてもきわめて少なかった。*bij* は *bajгаа*, *bajdag* に取って代わられつつ使用頻度を減じている書き言葉的な表現であると思われる。

以下、モンゴル語の存在「ある」を意味する、*bajna*, *bajгаа*, *bajdag* は話し言葉において次のように使用される。

bajna は探してみたりした上で「発見」したものの存在を伝える場合に使用する。この点は橋本・谷 (1993: 82) の指摘した通りである。ただし *bajna uu?* は対話文3におけるように、探しに行った1人が探しているものの存在を確認した時に、その存在を知らないもう1人の相手が質問する場合にも使用する。

橋本・谷 (1993: 82) は、「未知・発見」は相手が知らない新しい情報として、存在を告げる場合に使用すると述べているが、「相手が知らなかった新しい情報の存在を問う質問」にも *bajna* が使われる。

bajгаа は「あることを知っている場合」に使用する。橋本・谷 (1993: 82) は「相手がすでに知っている古い情報として、存在を告げる場合」に *bij* が使われるとしているが、調査の結果、現在話し言葉では *bajгаа* が使用されることが分かった。質問の *bajгаа juu?* は探しているものの存在を知るために、その探しているものがあるか否かを知っていると思われる相手に「今、～はあるか」と尋ねる場合に使用する。

橋本・谷 (1993: 82) は、「既知・確認」は相手がすでに知っている古い情報として、存在を告げる場合に使用すると述べているが、「相手が知っている古い情報の存在を問う質問」にも *bajгаа* が使われる。

bajdag は *bajгаа* と同じく「あることを知っている場合」にも使用されるが、特に「普段、～はある」という恒常的な意味において使用される。典型的に恒常的な意味を表すのは、[前提情報が皆無の場合]に「普段、～はあるか」という質問を行う際の *bajdag uu?* の場合である。

このように、*bajгаа* 「既知」、*bajdag* 「既知」プラス恒常性という意味も持つため、両方とも使用可能なケースがあるが、発話時点での存在に焦点を当てる場合には *bajгаа* の方が使用しやすく、恒常的な存在に焦点を当てる場合には *bajdag* の方が使用しやすい。

5. 今後の課題

本発表では現在の存在についての調査結果を報告したが、過去形やその他のアスペクトの使い分けについて調査し分析する必要がある。更に、本発表ではアンケート調査の結果のみになっているため、今後はコーパスと自然談話を使用して調査しなくてはならない。

略号一覧: 1 first person 1人称 /DAT dative-locative 与位格 /CNT continuative 継続 /CVB converb 副動詞語尾 /EP epenthesis 挿入音 /GEN genitive 属格 /HAB habitual 習慣 /OPT optative 希求 /PN personal name 人名 /PRS present 現在 /Q question particle 疑問小辞 /SG singular 単数.

参考文献

橋本勝・谷博之 (1993) 『モンゴル語文法・講読』東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。/橋本邦彦 (2010) 「存在と所有の間 — モンゴル語の存在文と所有文の意味論 —」『北海道言語文化研究』8: 105-127。/ムンフダラム, バスバヤル (2021) 「モンゴル語の存在文について — *baj-* と *bij* を対象に —」東京外国語大学修士論文。/栗林均 (1992) 「モンゴル諸語」亀井 孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』第4巻: 三省堂。/Tserenpil, Dandii-Yadamyn and Rita, Kullmann. (1996 [2005 rev.]) *Mongolian Grammar*. Ulaanbaatar: Admon Co., Ltd。/梅谷博之 (2012) 「モンゴル語の所有を表す接辞」『北方言語研究』2: 47-72.